様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ９ 月　 ５ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３６０００５

研究課題名（和文）中国社会の秩序生成原理の探求～場に立ち現れる「理」～

研究課題名（英文）A study on the dynamics of order formation in Chinese society

研究代表者
安冨　歩（YASUTOMI, Ayumi）

東京大学・東洋文化研究所・教授

研究者番号：２０２３９７６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：いわゆる「共通の」何かによって社会秩序を担保する、という発想の限界を離脱するために、中国社会の紛争の場面における解決の作動原理を探求した。その結果、周囲にいる人々の好奇心に基づいているように見える、いわゆる「野次馬」的な行動が、重要な役割を果たしていることが明らかとなった。かつて路上で頻繁に展開されていたその現象は、現在ではインターネット上で観察される。この原理は、人類社会、一般に見られるものと予想している。

研究成果の概要（英文）：We studied the dynamics of the formation of social order in Chinese society in order to overcome the limit of the way of thinking of "communis", namely to have something common in order to make order. Whenever anything happens, the scene is soon filled with a crowd of curious onlookers in China. We found this phenomenon has strong effect to revive social order. Now we can see similar phenomena in internet. We expect this dynamic could be common in all human societies.

研究分野：社会生態学

キーワード：中国　秩序　野次馬　ワラワラ現象

１．　　研究開始当初の背景

現代の人文社会諸学が、ヨーロッパを起源とした認識枠組みの上に成立していることは言うまでもない。その枠組のなかに「共通の communis」という概念があることは、広く見出されるところである。社会秩序が形成されているときには、何かが「共有」されているのであり、逆に、紛争が発生している場合には、共通のなにかが欠けているのが原因だ、という考え方である。

しかし、この考え方は果たして正しいのであろうか。そもそも、異なった身体を持ち、まったく異なった経験を経て生きる二人の人間が何かを「共有」することは、可能なのだろうか。たとえば両者共に絶対にして唯一の「神」を信じている、と言ったところで、その「神」が、同じかどうかを、どうやって確認する、というのであろうか。

とすれば学問的に厳密に秩序形成について考えるなら、何事も共有されていない、という前提で秩序が形成されうるのか、という問題を考えなければならない。そこで我々は、中国社会をその問題を考えるための空間として設定した。というのも、中国はヨーロッパに匹敵する深く広い文明的文化的伝統を持ち、人類社会に巨大な影響を持つ社会だからである。

中国社会の秩序形成については、膨大な研究蓄積があるが、振り返ってみるならば、全体を統一的に理解する枠組みは提示されていない。本研究では、法学・思想・文学・歴史学・経済学・人類学・社会学などに蓄積された成果を立体的に組み合わせることで、その原理を、普遍性をもった形で取り出すことを目指した。

２．研究の目的

我々が、特に注目したのは、道端で行われるケンカに、多くの野次馬がワララワっと集まる、あの現象である。これを我々は「ワラワラ現象」と仮に名づけた。中国に関わるものは誰もがこの現象に気づいてきたが、この「場」に作動する論理を真剣に論じた者はいない。我々はここに注目することで、中国社会の秩序形成の本質を明らかにしうるのではないか、と直感した。このような、一見すると些末な現象に着目することで、「共通の」なにかに依拠することのない、秩序形成の原理を見出しうる、と考えたのである。

３．研究の方法

中国研究に従事する者は誰であれ、常にこのような状況を目にしてきた。街角で撮った写真や、知り合いから聞いた噂話といった、とりとめもないものの中に、このような現象の資料が残されていることが多い。

こういった一見、雑多な調査データを、「ワラワラ現象」という概念によって再検討し、新しい角度から考え直すとともに、現代中国社会のマスメディアやインターネットといった空間の中に、同様の現象がないかを精査した。

また、古典文学・古典哲学を新しい観点で読み直すことで、中国社会の構成原理を明らかにする諸概念と取り出す方向性を導入した。

４．研究成果

最初に集中的に調査したのが、香港の「雨傘革命」と呼ばれる政治運動の中で展開した語りである。

次に、中国社会で急速に勢力を拡大しつつある、ニンマ派のチベット仏教をめぐるコミュニケーションに注目した。この点で、川田進が多年にわたって行った東チベット仏教についての実地調査が非常に重要であった。その成果は、『東チベットの宗教空間: 中国共産党の宗教政策と社会変容』（現代宗教文化研究叢書）北海道大学出版会、2015 年としてまとめられている。安冨は、その指導的僧侶で中国でベストセラーといくつも刊行しているケンポ・ソダジの講演会を東京大学で開催する機会を得て、日本在住の中国人が、SNS を通じた噂の伝播により、各地から集ってくる様子をつぶさに観察した。この観察から、中国共産党政権によって生み出された巨大な宗教的空白に、東チベット仏教が滔々と流れ込み、コミュニケーションの巨大な渦を生み出しつつあることが明らかとなった。

中国広東省での調査では、都市の再開発の波に押されつつも、依然として残された街角のそこここに人々の「おしゃべり」の場が生き残っており、さらに海外でも、改革開放後温州人のネットワークが主たる移民を構成しているイタリア都市部では、同様のダイナミクスが見出された。

また、中国の明代の演劇と日本の文楽とを比較し、後者に「ワラワラ現象」が欠落していることを発見した。更に、インドとの比較により、婚姻の際の血縁タブーの違いが、社会構造に決定的影響を与えていることを見出した。

研究を開始する時点で安冨は、『論語』を「フィードバックと学習」という観点から読み直し、それがサイバネティックな社会秩序形成の議論として一貫している、と考えていた。「仁」という論語の基礎概念は、学習回路が作動し、他者との関係性のなかから、自らが成長する、という創造的態度のことである。

このように考えれば、「仁者」とは、頑なに閉じた心を持つ者でさえ、対話を通じて心を開かしめ、学習回路を作動させて「仁」へと導く者であり、また双方が 仁の状態にあるときのコミュニケーションのあり方が「礼」に叶ったものとなる。このような個人の フィードバックと学習とが関係性を通じて連鎖することで、社会秩序が形成される、というのが、儒家の教えだ、ということになる。

「ワラワラ現象」が成立して「理」が形成される背後には、この儒家の伝統が潜んでいるのではないか、と考えられる。一方で法家は、個人による秩序形成を信頼せず、社会を一つのシステムとして捉え、合理的な思考によって厳密なフィードバック回路を構築し、社会 全体に「法」としてインストールするアプローチだ、と理解することができる。

一方、中国法を歴史的に研究する高見澤は、「律」によって厳密に刑罰を記述し、「令」によって褒章を規定し、双方合わせてフィードバックを掛けるシステムとして、中国の法体系を理解しており、この「律令」に当てはまらない領域を権力は放置するのだが、まさにその空間が、儒家的な「説理・心服」によって秩序化されていく。「ワラワラ現象」は後者の領域に生じる現象であると共に、前者の機構にも影響を与えているものと考えられた。

この観点からの実地調査により、この予想が概ね正しいことが確認され、これが現代のインターネット空間にまで広がっているものと考えられる。

そして、安冨は、このような研究の過程で、『老子』に代表される自然観が、このような「道」による原理の秩序形成の背後で働いていることが見出した。「道」という概念は、「名」と対立するものであり、ものごとのあり方を表現すると安冨は考え、この観点から、『論語』などの古典を再解釈する研究を展開した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

川瀬由高 2018.3「共同体なき社会の＜韻律＞――中国南京市郊外農村における非境界的集合をめぐる民族誌的研究」（首都大学東京大学院人文科学研究科博士論文）

川瀬由高 2017.10「日本关于汉人农村的“共同体”论与“祭祀圈”论：回顾与展望」『“俗”与“圣”的文化实践』、范可・杨德睿(編)、pp.92-118、北京：中国社会科学出版社。（ISBN 978-7-5203-0494-8）

高見澤磨「民間借貸」の法的枠組と中小企業金融・個人向け金融」日本中国友好協会『研究 中国』刊行委員会『研究 中国』巻 125、39-45 頁、2017 年

安冨歩「すばる eye　天安門から香港占拠へ」『すばる』巻：37(3)、242-245 頁、2015 年。

深尾葉子「すばる eye　It was not a dream. －香港雨傘革命七九日間」『すばる』巻 :37(3)、246-249 頁、2015 年。

安冨歩「『論語』の「道」とはなにか」『東洋文化』９５巻、11-58 頁、2015 年。

安冨歩「異界についての一考察」『東洋文化』９５巻、115-134 頁、2015 年。

〔学会発表〕（計１件）
川瀬由高 2017. 5. 27.「村の電気三輪車――中国農村の定住生活における「車」の役割をめぐって」、日本文化人類学会第 51 回研究大会、於：神戸大学。

〔図書〕（計５件）

高見澤磨、鈴木賢（編）『要説 中国法』2017 年、392 頁、東京大学出版会。

安冨歩『老子の教え あるがままに生きる』2017 年、255 頁、ディスカバー21。

安冨歩『あなたが生きづらいのは「自己嫌悪」のせいである。他人に支配されず、自由に生きる技』2016 年、105 頁、大和出版。

安冨歩『満洲暴走～隠された構造　大豆・満鉄・総力戦～』2015 年、256 頁、KADOKAWA。

遠藤誉、深尾葉子、安冨歩『香港バリケード～若者はなぜ立ち上がったのか～』2015 年、304 頁、明石書店。

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
安冨歩　(YASUTOMI Ayumi)
東京大学　東洋文化研究所　教授
研究者番号：20239768

(2)研究分担者
高見沢磨 (TAKAMIZAWA Osamu)
東京大学　東洋文化研究所　教授
研究者番号：70212016

深尾葉子 (FUKAO Yoko)
大阪大学　大学院経済学研究科　准教授
研究者番号：20193815

(3)連携研究者
大木康 (OKI Yasushi)
東京大学　東洋文化研究所　教授
研究者番号：　70185213

(4)研究協力者
川瀬由高 (KAWASE Yoshitaka)
首都大学東京　社会人類学研究室　博士課程